

ファミリー DAY 2018レポート

11月3日の開館記念日に合わせ家族を対象に実施している「ファミリー DAY」。今年はまだ休館中の、でも改修工事が完了したばかりの当館で特別に100組のご家族を招待して開催しました。会場はピッカピカの空間に生まれ変わったギャラリー（旧市民ギャラリー）とレクチャールーム。そこで、時間中自由に参加できる6つのワークショップを行いました。紐を結び空間を構築する「ひもひもジャングル」。所蔵作品の塗り絵やコラージュを制作する「ぬってみよう!はってみよう!」。大きな模造紙にみんなで水玉を描く「水玉どっこむ」。福岡市植物園による「落ち葉のスタンドグラス」。筆者が担当した「オリジナルの武具をつくらう!」は所蔵作品『韃靼人狩狼図屏風』の複製を鑑賞し画用紙やおわん、スポンジなど様々な素材で武具を作ります。子どもたちの手にかかると身近な素材が魅力的な武具に変身します。そして、一番人気はアーティスト牛嶋均さんによる「秘密基地をつくらう!」。大量の段ボールを使い、親子で協力して作る基地はどれも個性的でユーモアあふれるものばかりです。どのワークショップでも大人も、夢中になっている子どもと一緒に、親子で制作を楽しんでいました。今回の「ファミリー DAY」は近隣大学の学生と当館ボランティア合わせて47名の協力があったことで実現できたものです。参加者の皆様、そしてスタッフとして協力くださった皆様、本当にありがとうございました。リニューアルオープン後も皆様により一層楽しんでいただける美術館になるべく邁進いたします。

(上野真歩)



〈ふくおか応援寄付〉

福岡市美術館が魅力的であり続けるためには、今後とも機会あるごとに美術品を収集することが不可欠であり、そのための資金として皆さまから「ふくおか応援寄付」(ふるさと納税による寄付)を募集しています。10万円以上で寄付いただいた方には、特別企画展開会式の招待状(1年分)を、また、福岡市外にお住まいの方で一定額以上の寄付をされた方には福岡市の特産品をお送りします。みなさまからの応援をお待ちしています!

問合せ|リニューアル事業課 Tel 092-714-6051

ふくおか応援寄付 検索

所蔵品紹介

藤森静雄 《亡びゆく肉》 (公刊『月映』IV所収)

1915年 | 木版・紙 | 19.3×13.6cm



裸形の人物が一人、薄明かりの中で青白く浮かび上がっています。骨と皮だけになった右手を前に差し出し、足先を伸ばして、今まさに地上を離れようとしています。その薄い体には8本の黒い手が蛇のように絡みつき、みぞおちや肩、足を捉えて離そうとしています。人物は目を瞑り、その横顔は諦念をたたえています。本作は、木版画家の藤森静雄による七点の連作「妹ゆきぬ」のうちの一葉です。久留米出身の藤森は美術家を志し、1910年に東京美術学校受験のため上京しました。そこで出会った田中恭吉、恩地孝二郎と木版画と詩の雑誌『月映』を共同制作し、1915年1月発行の公刊第4号で本作を発表しました。当時24歳だった藤森は、親しい人々の体を触む病や死の気配を感じながら制作をしていました。不治

の病とされていた結核が流行し、田中をはじめとする近い友人も同じ病に見舞われます。妹の芳子を17歳の若さで亡くしたことは藤森に生の傷を痛感させ、わずか2ヶ月後に妹の死を主題とした本作を発表しました。《亡びゆく肉》には力強い彫りによって死へ向かう人物の姿や表情が描き込まれています。べったりと貼りつく黒い手に捉えられながらも、人物の背後には三角刀で刻まれた白い光が揺らめき、魂の輝きを思わせます。死にゆく生を肯定するイメージを生み出した藤森にとって木版は数ある表現手法の一つではなく、親しい人々との別れを受容するための祈りの行為だったのではないのでしょうか。

(忠あゆみ)
9月から近現代美術係に兼任しました。これからよろしくお願いたします。

【つきなみ講座】

休館中も実施してきたつきなみ講座ですが、館外での講座は2月で最終回となります。3月からは、あたらしくなった福岡市美術館で開催!初回は特別編です。いずれも事前申込不要、参加無料。受付は開始時刻の30分前からです。

1月26日(土) 15:00~16:00
福岡市美術館の仏教美術・IV
「密教美術 — インドの表現 —」
密教とは、インドのパラマណ教の影響を受けた仏教の一派で、わが国では空海による真言宗と最澄による天台宗が代表です。そのインド的な表現を見て行きます。
錦織亮介(当館館長)
場所:福岡アジア美術館 あじびホール
定員:50名

2月16日(土) 15:00~16:00
休館中の所蔵作品の保存・修復
福岡市美術館の休館中、作品はどうしていたのでしょうか?所蔵作品の多くは適切な保存環境のもと保管され、また、いつかはリニューアルオープンに向け修復しました。今回は福岡市美術館が行った保存・修復作業を紹介いたします。
渡抜由季(当館学芸員)
場所:福岡アジア美術館 あじびホール
定員:50名

特別編
3月23日(土) 14:00~15:45
東光院仏教美術室リニューアル記念
「徹底解説!東光院のすべて」
東光院仏教美術室はリニューアル工事を経て、新たな空間へと生まれ変わりました。展示室はどのように変わったのか、詳しくご紹介いたします。また、展示されている仏像について、最新の研究成果をもとに解説します。
錦織亮介(当館館長)、宮田太樹(当館学芸員)
場所:福岡市美術館 ミュージアムホール
定員:180名

福岡市美術館 リニューアルオープン記念展 これがわたしたちのコレクション+ インカ・ショニバレMBE: Flower Power

会期:2019(平成31)年3月21日(木・祝)~ 5月26日(日) ※59日間

休館日:毎週月曜日(ただし、4月29日と5月6日は開館し5月7日(火)休館)

時間:午前9時30分~午後5時30分 ※入館は閉館の30分前まで

観覧料:一般1,500円(1,300円)、シルバー 1,000円(800円)、高大生1,000円(800円)

※中学生以下、身体障害者手帳等、特定疾患医療受給者証等の提示者は無料。シルバーは満65歳以上、()内は前売りおよび20名以上の団体の割引料金。

主催:福岡市美術館、西日本新聞社、毎日新聞社、TNCテレビ西日本、FBS福岡放送、TVQ九州放送 共催:NHK福岡放送局
助成:公益財団法人野村財団、公益財団法人福岡文化財団、グレイブアリエン・ササカワ財団、大和日英基金
協力:ブリティッシュ・カウンシル、西澤株式会社

記念展ご観覧の方には、 リニューアルオープンならではの特典付!

- ・リニューアルオープン記念展終了後、コレクション展示を1回無料ご招待
- ・抽選で福岡市美術館オリジナルグッズのプレゼント
- ・チケット又は半券で、カフェ・レストランでの特典サービス など



ESPLANADE 194

福岡市美術館 季刊誌

エスプラナード

194号

January, 2019

福岡市美術館では、改修のための工事が2018年9月末に終わり、館外に保管していた美術品の移送など開館に向けた準備を進めています。去る11月4日には、抽選で選ばれた参加者に完成した姿をご覧いただく美術館見学ツアーを開催しました。今回のエスプラナードでは、残念ながら参加できなかった方にもあたらしくなった福岡市美術館をご紹介します。また、あわせてリニューアルオープン記念展の情報をお届けします。まっさらな展示室に並ぶ作品たちを想像しながら、2019年3月21日(木・祝)の開館までもう少しだけお待ちください。



福岡市美術館 リニューアルオープン記念展

撮影:(株)エスエス上田新一郎

これがわたしたちのコレクション+インカ・ショニバレMBE: Flower Power

福岡市美術館のリニューアルオープン記念展「これがわたしたちのコレクション+インカ・ショニバレMBE: Flower Power」は、コレクション展と企画展という美術館の展覧会活動の両輪をひとつの展覧会として打ち出したものです。リニューアルにより生まれ変わった美術館展示室すべてを用いて、当館の今後の活動のあり方を示す展示を行います。コレクション展示室およびギャラリー A~Fでは、「これがわたしたちのコレクション」を開催。当館が40年以上にわたって収集してきた約16,000点のコレクションの中から、代表的な作品約250点を一堂にご紹介します。開館以来、最大規模のコレクション展示となります。特別展示室では、英国を拠点に国際的に活躍する美術家インカ・ショニバレMBEの国内初個展「インカ・ショニバレMBE: Flower Power」を開催します。

これがわたしたちの コレクション

サルバドール・ダリ、ジョアン・ミロ、マルク・シャガール、アンディ・ウォーホル、ジャン＝ミシェル・バスキア、草間彌生といった当館のスターの作家の作品の展示をはじめとして、明治期の洋画からポップアート、そして現代美術にいたるモダンアート100年の歴史をたどる内容の展示を行います。また近年収蔵した同時代の作家の作品もしっかりご紹介。拡張されたコレクション展示室を十全に生かし、当館の近現代美術コレクションの特徴を余すところなくお届けします。

古美術のコレクションからは、黒田家伝来の宝物や仙厓の書画など福岡にゆかりの深い作品に加えて、電力王・松永安左エ門が蒐集した珠玉の茶道具、さらに中国・朝鮮・東南アジアなどアジア各地の古美術の名品を展示します。また、東光院仏教美術室は寺院をイメージした新たな空間へと生まれ変わりました。重要文化財を多数含む美しい仏像の姿を360度から鑑賞することができます。

室数の増えたギャラリーでは、当館の個性が際立つ「九州」にかかわる5つの特集展示を行います。久留米出身の洋画家で版画も多数制作した「吉田博」、当館が初の回顧展を開催し評価の先鞭をつけた「藤野一友」、戦後の福岡に登場した前衛美術グループ「九州派」、気品と清潔感を兼ね備えた柿右衛門様式の色絵磁器に代表される「九州古陶磁」、日本の仏教美術の源流をたどる「アジアの仏教美術」を、それぞれまとめて見られる稀有なる機会です。1979年の開館以来、空前の規模のコレクション展。満を持して、お届けします。

インカ・ショニバレMBE: Flower Power

タイトルに掲げるFlower Powerとは、「花」と「力」。英国を代表するアーティストであるインカ・ショニバレは、長年にわたって、花をモチーフに用いたさまざまな作品を制作しています。青年期までナイジェリアで過ごしたショニバレは、鮮やかな色と奇抜な

柄が特徴的な綿布を作品に用いることで知られています。この綿布は「アフリカンプリント」と呼ばれることがありますが、実はインドネシアのバティック(ろうけつ染め)をもとにヨーロッパで製造され、アフリカに根付いたものです。ショニバレは、「…らしさ」という固定観念に疑問を投げかけ、作品を通してその背景に目を向けさせます。本展は、ショニバレの日本初の個展であり、花をモチーフとした作品を、代表作とともに展示します。今回、福岡市美術館のリニューアルオープンを記念して、桜をテーマとする新作を発表します。華やかでドラマティックな作品群は、その美しさの先にある、驚きと刺激に満ちた体験を与えてくれるでしょう。

【インカ・ショニバレMBE】
1962年英国(ロンドン)生まれ。バイアム・ショウ・スクールで美術、ゴールドスミス・カレッジ修士課程で芸術学、哲学を学ぶ。2000年代より数々の国際芸術祭に参加。2005年英国より大英帝国勲章団員(MBE)の称号、2013年ロイヤルアカデミーより「アカデミー正会員」(RA)の称号を授与される。2010年以降は、屋外彫刻の制作にも取り組む。



インカ・ショニバレMBE 《ハイビスカスの下に座る少年》2015年



インカ・ショニバレMBE Photo: Courtesy of Marcus Leith RA

あたらしい福岡市美術館、ひとあし先に、徹底解剖

工事前の囲いが取り払われ、あたらしい姿を現した福岡市美術館。大濠公園からその様子を既にご覧になった方も多いのでは？現在も着々とリニューアルオープンに向けた準備は進んでいますが、ここではひとあし先に、館内の様子を一部ご紹介します。

イラスト：坂田優子
本ページ内、特記なしの場合の画像 撮影：(株)エスエス上田新一郎



コレクション展示室・古美術

仏像や茶道具が置かれていた環境を想起させる展示が可能に

1階の「コレクション展示室・古美術」は次の三室からなります。松永安左エ門が蒐集した茶道具を中心とする日本・東洋美術コレクション(松永コレクション)を展示する「松永記念館室」、博多区吉塚の真言宗寺院・薬王密寺東光院から寄贈された寺宇を展示する「東光院仏教美術室」、当館古美術部門の所蔵品や寄託品を中心に様々なテーマのもとで展示する「企画展示室」です。今回のリニューアルでは、一部に可動間仕切り壁を新設し、ウォールケースには色温度可変式の照明を採用するなど、展示内容に合わせてフレキシブルに空間を分け、作品の魅力を一層引き立てる演出ができるようになりました。

特に大きく変わったのが、重要文化財の仏像を多数、間近で鑑賞できるスポットとして親しまれてきた東光院仏教美術室です。入口は山門(仁王門)のような設えとし、阿形・吽形の金剛力士像が迎えます。薄暗い室内に足を踏み入れると、須弥壇をイメージした大型展示台、その上に鎮座する御仏たちが厳かにその姿を現します。ウォールケースを撤去して空間を広げたことで、大型展示台の周囲をぐるりと巡り、周囲360度からじっくり、仏像鑑賞に集中できるシンプルなレイアウトに、山門や本堂内をイメージした空間ではありませんが、それは決して「再現」ではありません。寺院空間に存在する物の要素を選び抽象化して、展示空間として「表現」したものとします。宗教彫刻であり造形芸術でもあるという、二側面の魅力を等しく引き出すために出した結論です。(後藤恒)



東光院仏教美術室 撮影：山中慎太郎(Qayumi)



松永記念館室



ミュージアムショップ

所蔵品にまつわるグッズから、福岡在住作家のプロダクトまで

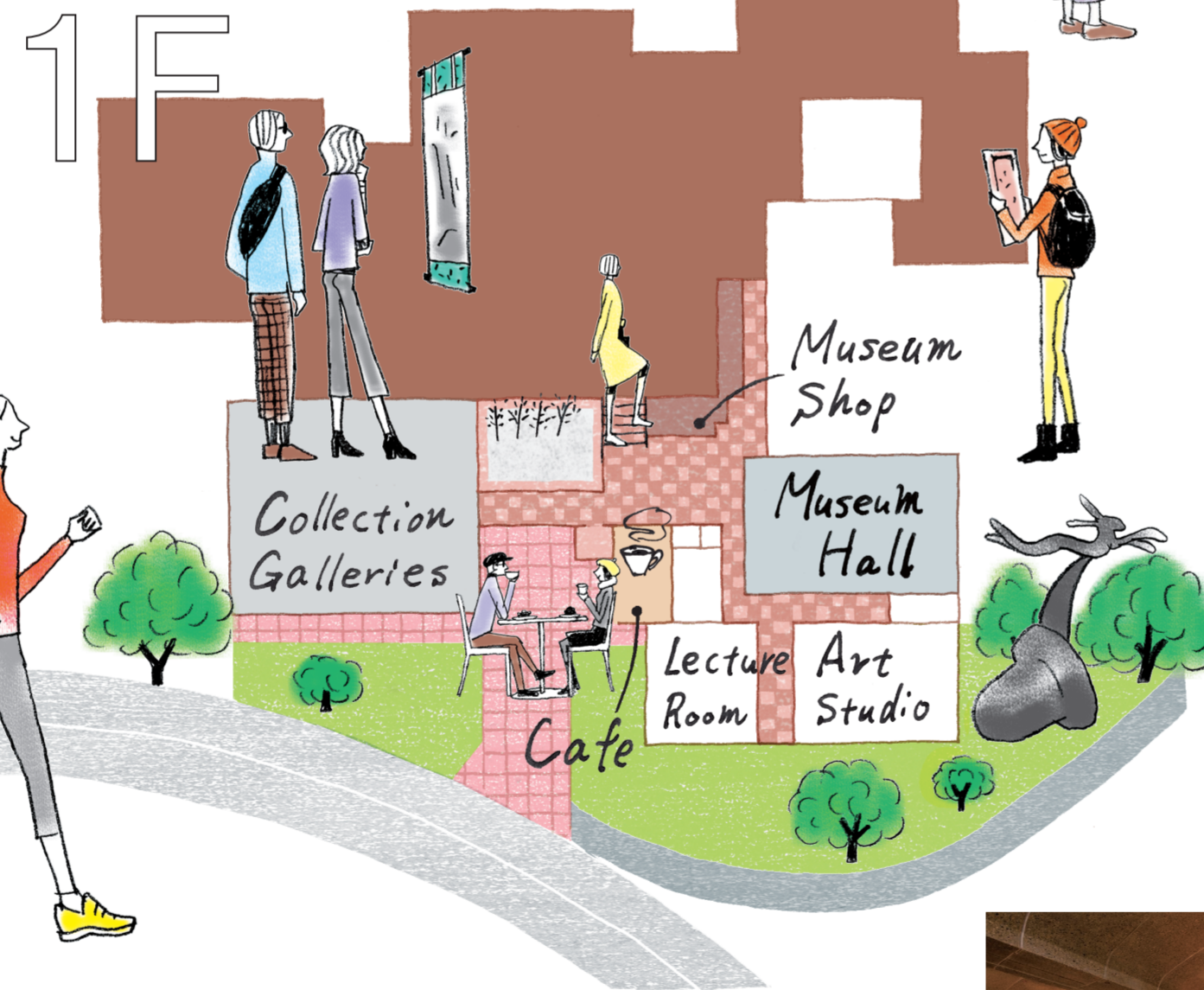
美術館訪問をする人たちの楽しみの一つでもある「ミュージアムショップ」。2階から1階ロビーに移動し、(株)オークコーポレーションの運営で生まれ変わったショップでは、古美術と近現代美術にわたるバリエーション豊かな当館の所蔵品をモチーフにしたオリジナルグッズが、ショッピングを楽しみながら見られる。高取焼宗家の高取八山さんが、所蔵品である茶碗の「うつつ」を制作。これを販売することになりました。他にも、博多人形や博多織などの伝統工芸品や、福岡在住の陶芸家・鹿見島睦さんや水引デザイナー・長浦ちえさんらのグッズも扱われ、幅広い人が楽しめるショップになりそうです。



「高取焼」制作作品を選定している高取八山さん。慎重に作品を手に取り、質感や茶碗の厚み、軸葉の具合などを確かめます。江戸時代から黒田藩の御用窯として全国に知られていた高取焼。伝統のおごりその美しさを現代に引き継ぎます。(H↑画像提供：オークコーポレーション)



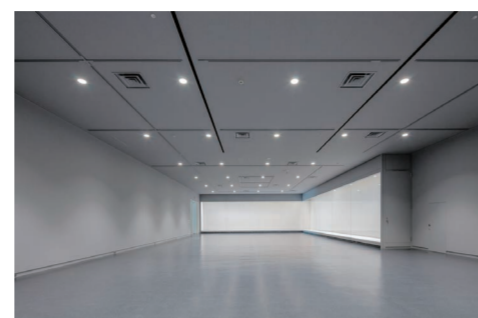
当館でも人気の(コブクシ土俵)がグッズになりました。写真は試作段階ですが、その愛らしい姿に笑みを浮かべてしまうこと間違いなし！完成をお楽しみに。(H↑画像提供：オークコーポレーション)



コレクション展示室・近現代美術

小さな版画から大きな彫刻まで 作品を効果的に展示できるようになりました

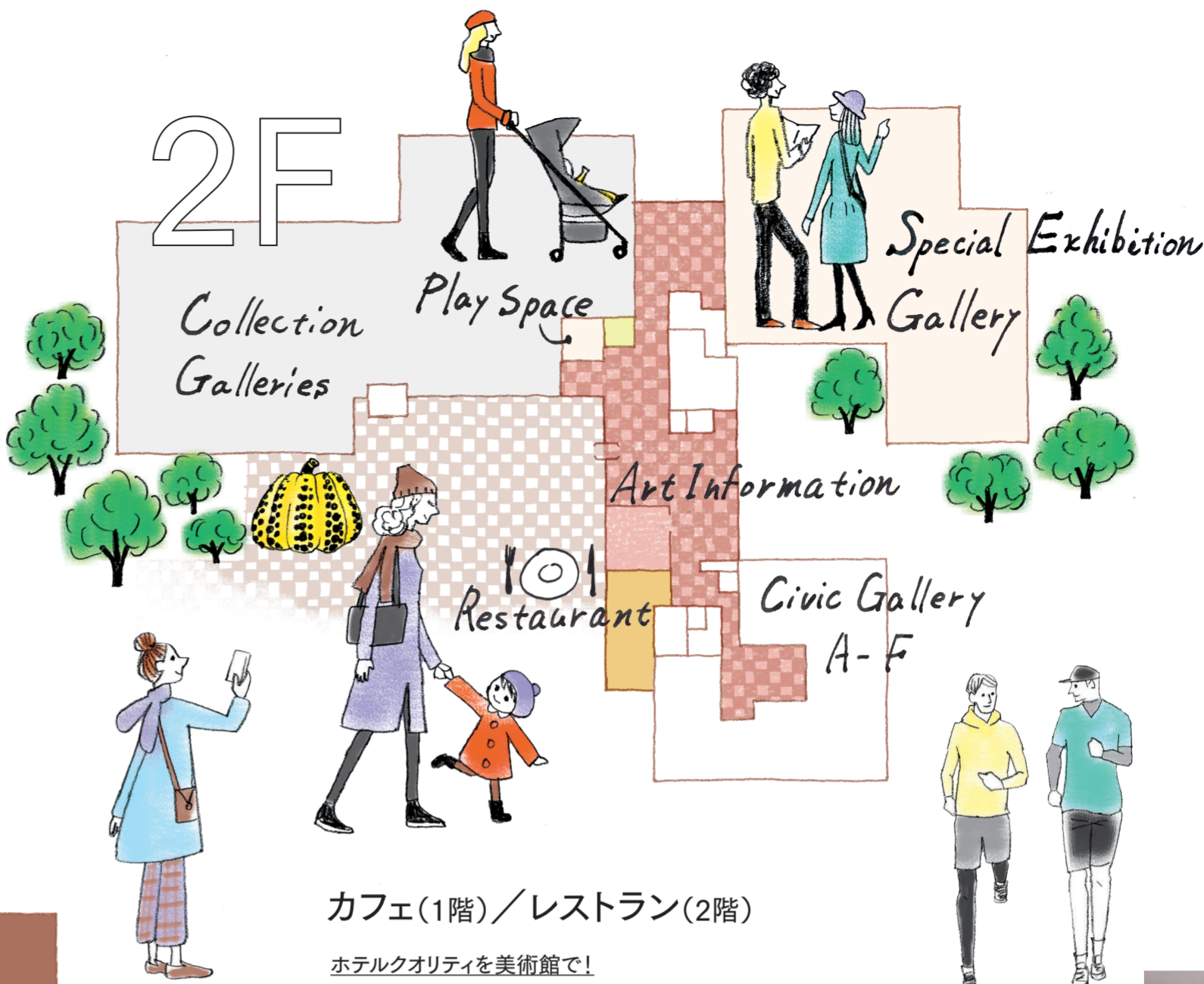
すべての内装と照明を一新しました。近現代美術室Aは、従来の日本画工芸室と特別展示室Bをつなげた新しい展示室です。ここはあえて内装の色調をグレーに統一しました。落ち着いた雰囲気や油彩画や日本画を鑑賞できます。近現代美術室Bは、床をフローリングに、天井をメッシュにしました。映像や写真、インスタレーションといった、新しい表現方法を用いた美術作品の展示にも対応可能です。もちろん、版画や水彩画など、小さな作品の展示もここでを行います。企画展の開催にも向く、自由度の高い展示室です。真っ白で大きな空間の近現代美術室Cでは、大型の絵画や彫刻をメインに展示をします。当館では、大型の彫刻作品を多数所蔵しておりますが、そのうちのいくつかは、ロビー回りに展示していましたが、しかし照明器具などが作品展示に対応していなかったため、あまり効果を上げられなかったのです。しかし、新しくなった空間では、そうした大型の彫刻作品も効果的に展示ができそうです。展示室内にあった窓は基本的にはふさいでしまいましたが、北側の大きな窓だけは残し、休憩スペースを設けました。作品鑑賞につかえて、外の眺めを見ながらほっと一息、という過ごし方もできます。(山口洋三)



近現代美術室A



近現代美術室B



カフェ(1階)/レストラン(2階)

ホテルクオリティを美術館で！ 日常使いできるレストラン&カフェ

ホテルニューオータニ博多が運営する1階のカフェと2階のレストラン。ホテルメイドのメニューを提供しつつ、ここでしか味わえないオリジナルフードも展開予定です。1階のカフェは、軽食やテイクアウトのメニューが中心。ホテルと同じ味が楽しめるカレーライスやサンドウィッチなどが提供される予定。オリジナルの「大濠シュー」やソフトクリームなど、スイーツも要注目。2階のレストランは、3日間かけて作られるコンソメスープをベースにしたオニオンングラタンスープをはじめ、おいさにごだわった和洋中の料理を楽しむことができます。そしてなんと！目にも楽しめる大濠公園の景色が、さらにおいさを引き立てます。最後にちょっと耳寄りな情報を。なんとカフェとレストランで提供されるコーヒーは、ローストを変えるそう。ぜひ飲み比べをしてみてください！



カフェで販売される、大濠公園の緑をイメージした「大濠シュー」の試作版。中身は、生クリーム・ソフトクリーム・アイスクリームからセレクト可。



レストランでは、本格的な味わいの定番お肉ランチも提供。(撮影：編集担当)

新アプローチ

一番大きな変身を遂げたのが、大濠公園からのアプローチ。開放的で、これまで以上に気軽に立ち寄っていただけるようになりました。



リニューアル工事は設計者である前川國男への敬意を払い、その意匠を継承するべく行いました。以前の照明や時計が再び館内で使われているのも、ぜひ注目してください。



夜はライトアップされ、アーチ型の天井などが昼間とはまた違った表情を見せます。観覧会の余韻をゆっくり楽しむよう、展示室の閉室後もカフェは夜7時まで、レストランは夜8時30分まで利用できます。

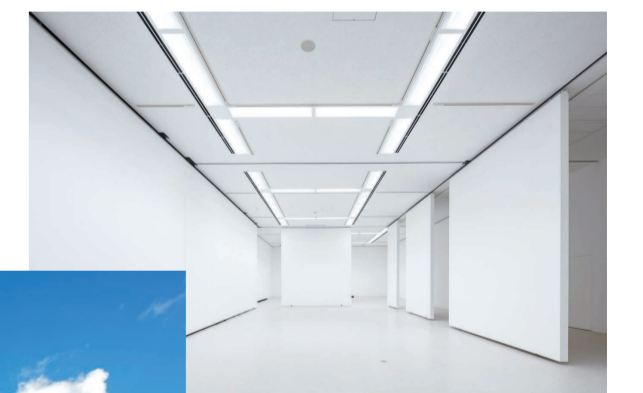
キッズスペース 森のたね

より楽しく、より使いやすいファミリーに優しい美術館になりました

2階のロビーにあった「キッズコーナー 森のたね」は、小さな子どもとその保護者の憩いの場所でした。畳の上でゆっくりくつろいだり、絵本を読んだり、取り外しができる壁のオブジェで遊んだり…時にはワークショップなんかもしていました。あの空間、リニューアルしたらどうなるの？と、心配になっていたのちびっことその保護者の皆さま、安心して下さい。「キッズスペース 森のたね」として、美術館のリニューアルとともに、この空間もリニューアルいたしました。制作したのは、福岡県久留米市在住のアーティスト・オーギカナエさん。そうです、以前のキッズコーナーと同じ作者です。「子どもたちとその保護者が安心して過ごせる場所に」「美術のたねをはぐくむ場所に」というオーギさんの思いは変わりありませんが、でも、もっと楽しく、さらに使いやすい空間になりました。例えば壁につけられたオブジェ。大濠公園と福岡の街をイメージして、優しいタッチで描かれた壁画のどの場所にもつたりはたりして遊ぶことができます。オブジェたちは、展示室に行った時も思い出して楽しめるよう、福岡市美術館の所蔵品にちなんで作られました。そして、今回大きく変わったのは授乳室です。女性専用のみならず、男性も赤ちゃんと一緒に入れる「赤ちゃんの休憩室」ができました。たくさんの小さな子どもたちと保護者の皆さまに利用していただければ嬉しいです！(鬼本佳代子)



撮影：山中慎太郎(Qayumi)



旧・市民ギャラリーは増室と可動壁の変更によって4室から6室に増えました。可動壁やレールも増えて自由なレイアウトが可能となりました。



ホールは、美術だけでなく文化・芸術・学術まで用途が広がり、映画の上映会、演劇、コンサートなどを実施できるようになりました。利用時間も21時まで延長。どうぞご利用ください。